

國學院大學伝統文化リサーチセンターが、文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業(オープン・リサーチ・センター整備事業)に採択され、『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』事業を開始したのは平成19年のことです。以来、わたくしたちは本学所蔵の学術資産を活かしつつ、広く研究者を受け入れ、日本の風土や文化が育んだ伝統の知恵と、その社会的意義を問うために研究・公開活動を推進して参りました。

当センターでは「祭祀遺跡に見るモノと心」・「神社祭礼に見るモノと心」・「学術資産に見るモノと心」というプロジェクトを立ち上げ、研究を展開し、その成果については、紀要・報告書をはじめとする刊行物・シンポジウム・フォーラム・WEBなどを通して公開しております。

しかし、「伝統の知恵と実践」を理解するために、何より力を発揮するのは、実際の「モノ」にほかなりません。したがって、伝統文化リサーチセンター資料

館で開催する展示こそ、当センターの公開事業の中で、最も重要な活動の一つと考えております。

そのような活動の中で、今回は本学における考古学の学問的伝統の形成を顧みました。明治44年に、高橋健自が考古学を講義するようになってから100年が経ちました。その間、先学の様々な努力が今日に至ります。わたくしたちは、その中から新たな発展を目指した知恵を探っていきたいと思います。

本展では、本学所蔵の代表的な考古資料を展観し、近代的学問の形成過程における本学考古学の位置付けや、様々な試行錯誤を、写真・刊行物や関係者の自筆草稿、実際の出土品などを通して回顧します。また、本学の特色である縄文研究・祭祀研究の一端もご紹介します。常設展も併せてご覧いただき、本学の考古学に触れていただければ幸いです。

平成23(2011)年4月
伝統文化リサーチセンター

例言

1. このパンフレットは、平成23(2011)年4月23日(土)～6月4日(土)を会期とする伝統文化リサーチセンター企画展「若木ヶ丘の歩けオロチー フィールドワークの足跡を辿って」の展示内容に関するものである。
2. パンフレットに収録されている資料でも、会場に展示されていない場合がある。
3. 本展の企画、およびパンフレットの編集・執筆は伝統文化リサーチセンター「祭祀遺跡に見るモノと心」プロジェクトが担当し、「國學院の学術資産に見るモノと心」プロジェクト及び学術資料館・考古学研究室・図書館・考古学会の協力を得た。





1

深鉢 隆起線文土器 石小屋洞窟遺跡出土(長野県須坂市大字仁礼) 縄文時代草創期

復元口径：約22cm・推定高：約25cm

石小屋洞窟は、奥行3m・入口部幅約3m・入口前テラス幅約3mの洞窟で、縄文時代草創期～晩期・弥生時代中期～後期の土器破片が出土している。本資料は、細い粘土紐を貼り付けた微隆起線文土器であり、洞窟入口部の灰が集中する箇所中央のくぼみから、押しつぶされたような状態で出土した。調査には、永峯光一・興津正朔・樋口昇一・磯崎正彦らが参加し、松田保彦が土器の復元を行なった。



2

深鉢 諸磯C式土器 花鳥山遺跡出土(山梨県笛吹市八代町・御坂町) 縄文時代前期

推定口径：約27cm・推定高：約25cm

花鳥山遺跡は、山梨県内で最も古くから知られていた遺跡の一つである。本学が調査を行なったのは、昭和29年頃で、調査参加者は樋口清之・下津谷達男・松田保彦と、沢四郎・志村文也など、考古学会の縄文部会のメンバーであった。調査は3回行なわれ、遺跡は縄文時代前期の諸磯式を主体とし、住居址が3軒検出された。樋口は、本遺跡の重要性から諸磯式を花鳥山式と称し、I式～IV式に分類している。



3

長頸壺 免田式土器 熊本県球磨郡あさぎり町出土 弥生時代後期

推定高：約41cm・胴部幅：約22cm

本資料は、重弧文長頸壺とも呼ばれ、そろばん玉状の胴部と長い頸、半円状を重ねた重弧文を特徴とする。『弥生式土器聚成図録』の解説を執筆中であった小林行雄が、このような重弧文土器に相応しい名称を考えていたところ、熊本県免田出身の乙益重隆が「免田」と提案したことで様式名が決まった。乙益は、高田素次とともに、熊本県あさぎり町本目遺跡出土資料の報告を行なっている。



4

二重口縁壺 桜井茶臼山古墳出土(奈良県桜井市外山) 古墳時代前期

高さ：約57cm

桜井茶臼山古墳(国指定史跡)は、全長約200mの大型前方後円墳で、古墳時代前期における大王陵級古墳の一つに数えられている。本資料は、竪穴式石室の直上に設けられた方形壇の周囲から出土した資料の一部だが、本来は壇上に並んでいたらしい。壺の底部には、焼成前から穴が開けられており、実用器としての機能を備えていないことから壺形埴輪とも呼ばれている。樋口清之が、地権者から寄贈を受けたものという。



5

石枕 姉崎二子塚古墳出土(千葉県市原市姉崎) 古墳時代中期 重要文化財

高さ：約12cm・幅：約29cm

姉崎二子塚古墳は、全長約93mの前方後円墳である。昭和22年に、大場磐雄の指導の下、本学考古学会によって調査が行なわれた。前方部のトレンチからは、鉄銚・直刀・銀製腰佩・瑪瑙勾玉が、後円部からは、蟠地文鏡・鏡片・大型勾玉・勾玉・管玉・ガラス小玉・滑石製刀子・有孔円板・立花状石製品・直刀・鉄銚・金銅装冑片が出土している。この常総型石枕は、付近の住民が松の根を掘り起こした際に、短甲・鉄族・馬具・鉄銚などと共に出土した。三段構成の側面には直弧文が施され、最下段には、立花状石製品を挿入する孔が6つ開いている。

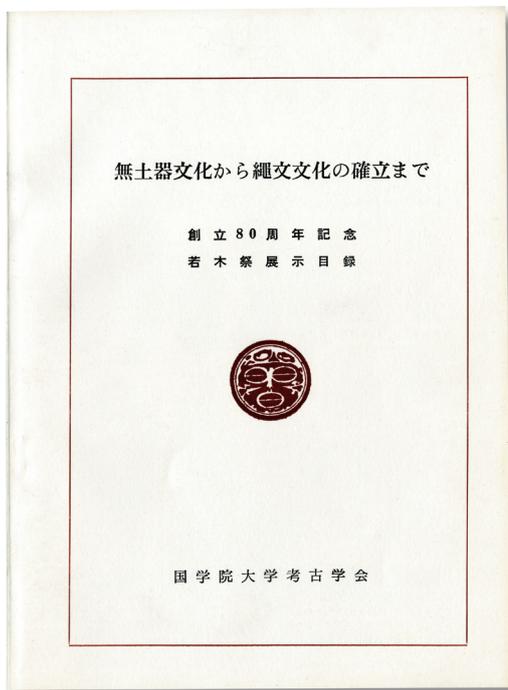


6
武人埴輪 埼玉県熊谷市出土 古墳時代後期 重要美術品
 高さ：約104cm

円筒形の器台部の上に立ち、身には甲冑や履を着用している。当初、東京帝室博物館(現：東京国立博物館)が、埼玉県野原古墳群の出土品で有名な「踊る男女」埴輪と共に埼玉県より受け入れたが、何らかの理由で発見者に返還された。後に、本学が金鑽宮守氏から寄贈を受けた際には、樋口清之が背負って大学まで運び入れたと伝わる。

縄文のはじまり

昭和37年春に修士論文「無土器文化から縄文文化への発展過程について」を提出して博士課程へ進んだ小林達雄は、その秋の若木祭における考古学会展示で「無土器文化から縄文文化の確立まで」を企画し、若手ながら学界の注目を集めた。その後、昭和53年に教員として母校へ着任した小林は、昭和54年に新潟県壬遺跡で開始した考古学実習を皮切りに、縄文のはじまりを主たるテーマとした学術発掘を指揮。山形県北堂C遺跡・明神堂遺跡、長野県小馬背遺跡・柳又遺跡、北海道美利河遺跡群、新潟県本ノ木遺跡など、次々と発掘を積み重ねてきた。このような研究路線を受け継いだ谷口康浩は、引き続き新潟県本ノ木遺跡・卯ノ木泥炭層遺跡の調査を進め、自然科学を含めた学際的立場から、この問題に取り組んでいる。



若木祭で展示された 埼玉県西谷遺跡出土品

昭和37年に、考古学会が創立80周年記念若木祭で開催した「無土器文化から縄文文化の確立まで」展では、旧石器時代から燃糸文土器以前までを扱い、資料の展示のほか、展示図録が刊行された。展示品の写真、目録一覧、解説などの内容が盛り込まれ、とくに、小林達雄が解説で示した燃糸文以前の編年大綱は学界の主流となった。

編年表

(昭和37年11月7日現在)

縄 文 早 期	IV 期	粗 施 文	貝殻沈線文 捺型文 無 <尖底>	福井 I 上黒岩4層 上黒岩6層	神宮寺, 大川	橋沢下層 卯ノ木	橋立III, 普門寺	田戸下 三戸 平坂 花輪台 I	日向, 上原田
		繩 文	燃糸文 <尖底>	九合洞窟	室谷II群	橋立II {	稲荷台 夏島 井草, 太丸	日向	
	III 期	文	繩 文 羽状縄文 <平底>		室谷I群	西谷	神立沢 一の沢 {		
	II 期	押 施 文	押圧縄文 (石槍) <平底>		本の木	西鹿田II			
		爪 形 文	爪形文 (長脚蹴)	福井II	椀ノ湖, 曾根	小瀬ヶ沢II	西鹿田I	日向	
		除 線 文	微隆起線文 細隆起線文 (有舌尖頭器) <丸底> 隆起線文 (細石刃)	福井III		小瀬ヶ沢I 橋立I		日向, 一の沢	
	無土器時代			福井IV	柳又A II 荒屋 矢出川				



昭和54年に、考古学
実習として新潟県壬遺
跡の調査が始まった。
以来、縄文のはじまり
を主なテーマに学術発
掘実習を行なっている。



壬遺跡からは、多数の円孔文土器が出土し、一躍注目を浴びることとなった。この調査によって、円孔文土器群の具体的な様相が明らかとなった。



ロシア連邦グロマトゥハ遺跡出土の土器は、円孔文土器との類似点や、その他の縄文時代草創期の土器の特徴との共通点が指摘されており、注目されている。

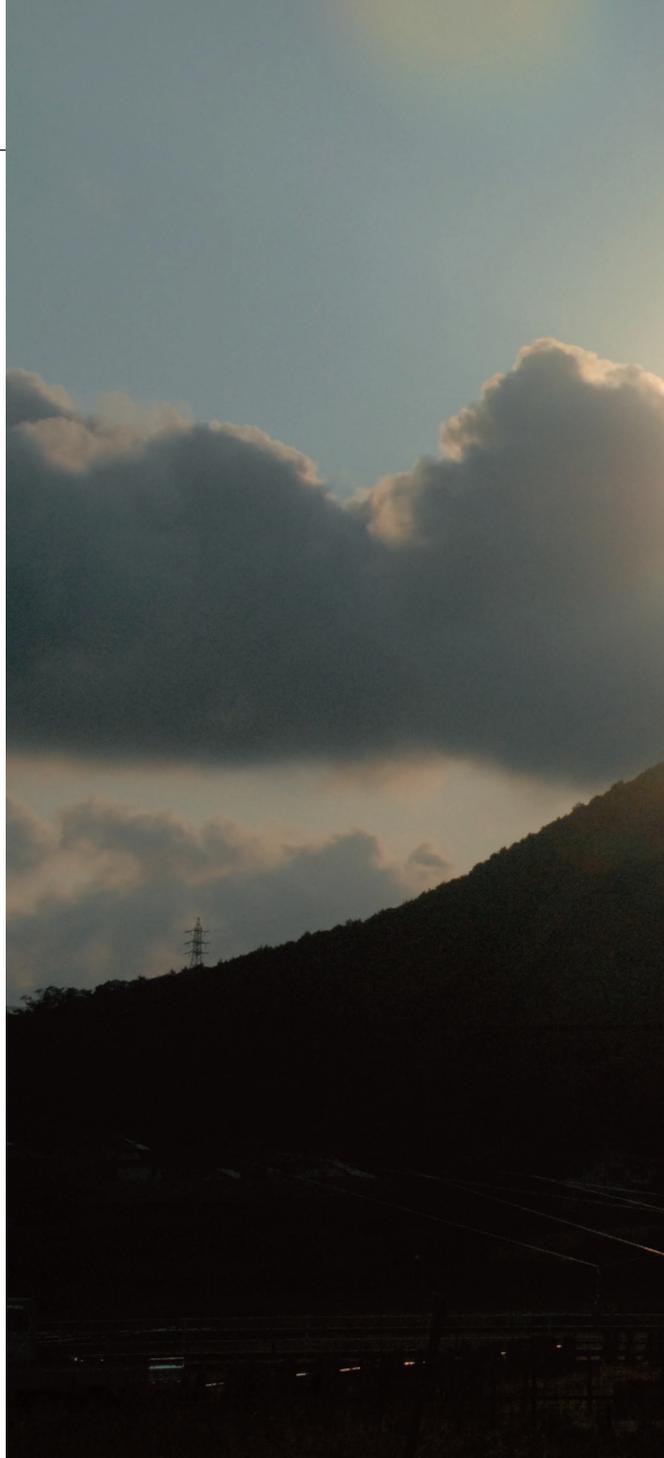
(寄贈：加藤晋平・可見通宏)

マツリの系譜

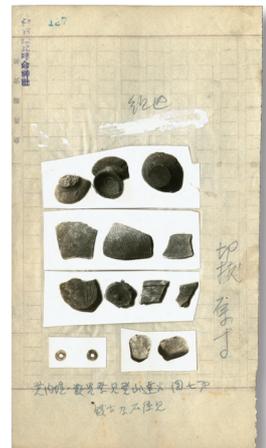
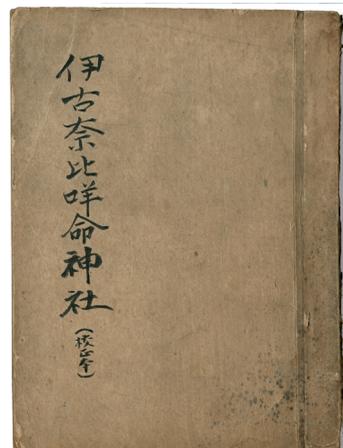
鳥居龍蔵・折口信夫・宮地直一から考古学・民俗学・神道史学を学んだ大場磐雄は、柴田常恵の仏教考古学に倣って「神道考古学」を大成した。大場学とも称すべき神道考古学は、折口学の影響を強く受けた民俗宗教考古学でもある。これを発展させた杉山林継は、比較民族宗教考古学としての「祭祀考古学」を唱え、広く海外における宗教考古学との協同を促した。大場が神道考古学を構想した伊豆地域は、その後も本学の研究フィールドとなり、吉田恵二による実習調査や、考古学資料館を主体とする学術調査では、考古学・歴史学・民俗学を動員して、伊豆・伊豆諸島の祭祀遺跡を検討している。



「神道考古学」誕生の契機は、静岡県洗田遺跡の調査にある。



静岡県洗田遺跡の出土遺物には、鏡・鉄製品や、鏡・剣・玉などの財を模したものなどが見られる。これが、典型的な「祭祀遺物」モデルの一つとなった。





この時春の陽も暮れかけて、夕陽が西に傾いた時、遺跡の西方に陽を背景にして兀然と私の眼底に映ったものは、三倉山の麗姿であった。三輪山に似た三角形の美しい小山、土地では吉佐美富士と称し、頂上に浅間社を奉祀するという。古代人が神の憑依すると考えた対象こそ、この山ではあるまいか。ここの祭祀遺跡はこの霊山を対象として行われた跡だろう。私はこの時一種の靈感に打たれたといつても過言ではなかった。私にはまだ残された仕事がある。古代祭祀址の研究こそ、その主眼となるべきではあるまいか、こんなことを思い立たせたのであった。

大場磐雄「神道考古学生たちの記」より



大場は、神社誌の編纂にも考古学的知見を活かしている。三嶋神の後神を祀る伊古奈比咩命神社(下田白濱神社)の社史は、神祇院の委嘱によって行なわれた。平成22年には、伝統文化リサーチセンターが白濱神社資料の再整理を実施している。

考古学実習でも、継続的に伊豆・伊豆諸島の信仰遺跡を調査してきた。三宅島の物見処遺跡は、礫石経を伴う大型積石塚である。

◇**上代文化研究会の創設** 國學院大學で考古学が講じられるようになったのは、高橋健自が講師に着任した明治44年に遡る。その時期には諸説あったが、同年に刊行された高橋の著書『鏡と剣と玉』に、「東京帝室博物館歴史部次長」の肩書とともに「國學院大學講師」と記載されており、『國學院雑誌』にも講師委嘱の記事があることで着任年が判明した。一方、明治43年から東京帝国大学教授の坪井正五郎が担当していた人類学の講義は、サンクトペテルブルクで坪井が逝去した大正2年以降、後任として松村瞭が受け持ったが、大正6年の学則改正に伴い休講した。

大正11年には、再び開講された人類学の講師に鳥居龍蔵が着任し、教授となった翌年からは考古学を講じた。鳥居の下には、旧制中学校時代から彼に師事していた谷川(大場)磐雄や、樋口清之らが集まった。鳥居は厳しく学生たちを指導し、その逸話は中川徳治・樋口清之が『若木考古』で述懐している。鳥居と学生は、「上代文化研究会」を創設し、神林淳雄・森貞次郎・江藤千万樹・佐藤民雄・長田實・七田忠志など学生時代から活躍する人物を輩出した。また、昭和4年には、大山柏公爵が創設した「史前学会」の支部が、本学図書館に置かれ、しばしば共同で遺跡調査が行なわれた。

昭和17年には、東京帝室博物館を退職した後藤守一が教授に着任する。終戦間際、後藤の講義はなかったものの、教授の職にあった。

◇**戦後の考古学徒** 戦後の混乱を経た昭和23年には、慶応・東京・明治・早稲田の学生とともに東京学生考古学会の設立に参画し、本学が最初の当番校となった。翌年、上代文化研究会は国学院大学考古学会と改称し、さらに『若木考古』を創刊して再始動した。大場や樋口の指導の下、静岡県登呂遺跡・長野県平出遺跡・山梨県花鳥山遺跡・秋田県大野遺跡などの学術調査に参加したほか、考古学会としても独自に埼玉県真福寺貝塚の発掘調査を行なった。昭和27年に本学で開催した日本考古学協会第9回総会では、縄文農耕論の特別発表に対する会場からの冷めた反応に肩を落とした藤森栄一が、『かもしかみち』の一説を引用した考古学会の新入会員募集ポスターで気力を回復したというエピソードが残っている。

昭和30年代以降、開発に先立つ大規模な緊急調査が増加し、神奈川県三殿台遺跡や中央道八王子地区遺

跡群(宇津木向原遺跡など)では、多くの大学が合同で発掘にあたった。これらの調査では、地元向けにガリ版刷りのニュースが発行され、毎年の若木祭(学園祭)でも調査成果が展示された。昭和40年には、考古学専攻が設置され、昭和43年には第Ⅱ部考古学研究会が発足した。こうした中、大きな高まりを見せた学生運動は考古学にも広がり、事前調査と文化財保護、歴史認識などが議論された。

◇**國學院考古の展開** 学生運動の熱も覚めやらぬ昭和55年、考古学実習として新潟県壬遺跡の調査が開始され、翌年からは東京都三宅島での調査も始まった。以降、縄文時代のはじまりと、伊豆諸島における中世信仰の解明を主たるテーマに毎年学術発掘実習を行ない、学生主体でまとめた報告書を刊行してきた。現在は、新潟県卯ノ木泥炭層遺跡と、長野県穂高古墳群の調査を継続している。また、時々の学生の関心などによって各種研究会が組織され、『うつわ』・『亜州学誌』・『古墳文化』などの雑誌を刊行し、考古学会の『上代文化』・『若木考古』も復刊された。

一方で、考古学資料館を中心にした調査も行なわれ、昭和61年の石川県白山山頂遺跡を皮切りに、東京都の伊豆諸島や山形県・北海道・富山県・福井県・広島県・静岡県・島根県で各種祭祀遺跡の調査が行なわれている。また、平成11年に採択された日本文化研究所の文部省学術フロンティア推進事業では、大場磐雄・折口信夫・柴田常恵らの資料整理を進め、現在も学術資料館や伝統文化リサーチセンターが仕事を引き継いでいる。

平成13年の本学創立120周年記念事業としては、英国や東京での展示会を開催したほか、モンゴル調査も行なった。翌年には、文部科学省21世紀COEプログラムに本学の「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」が採択され、考古学も研究グループの一翼として、中国・韓国・ベトナム・ロシアなどの地域をフィールドとした調査を行なっている。

現在は、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」事業が選定され、これまで蓄積してきた学術資産を研究するとともに、新たな学術資産を収集し、その成果を公開する展示・フォーラム・公開講座を企画している。

- 明治15(1882)年 皇典講究所創設
- 明治39(1906)年 私立國學院大學と改称
- 明治43(1910)年 坪井正五郎講師着任(～大2)
- 明治44(1911)年 高橋健自講師着任
- 大正2(1913)年 松村瞭講師着任
- 大正12(1923)年 鳥居龍蔵教授着任(昭8退職)、校舎が現在地に移転
- 大正13(1924)年頃 鳥居と学生の埴瑞比呂・佐伯敬紀・藤井貞文らによって「上代文化研究会」創設
- 昭和3(1928)年 樋口清之により「考古学陳列室」設置、『上代文化研究会パンフレット』第1号を発行(翌年『上代文化』と改称)
- 昭和4(1929)年 大場磐雄講師着任(昭24教授・昭45退職)、史前學會國學院大學支部新設、千葉県堀ノ内貝塚調査



曾谷貝塚

- 昭和12(1937)年 神奈川県谷戸貝塚・東京都代々木八幡神社境内遺跡調査
- 昭和13(1938)年 東京都根方貝塚・千葉県菅生遺跡(～昭16・23・47・48)・静岡県洗田遺跡調査
- 昭和14(1939)年 神奈川県谷戸貝塚調査
- 昭和17(1942)年 後藤守一教授着任
- 昭和20(1945)年 中川徳治助教授着任
- 昭和22(1947)年 静岡県登呂遺跡(～昭25)・千葉県姉崎二子塚古墳調査
- 昭和23(1948)年 新制文学部開設、上代文化研究会を国学院大学考古学会と改称、初石古墳群・群馬県采女村古墳群調査
- 昭和24(1949)年 東京都小金井縄文住居址・千葉県加曾利貝塚(D地点道路予定地)・栗島台遺跡・山梨県日下部遺跡(～昭25)調査
- 昭和25(1950)年 日本古代学会設立(会長折口信夫、副会長大場磐雄・西角井正慶)、長野県上原遺跡(～昭27)・千葉県天神台遺跡・船戸古墳・東京都和泉南遺跡・目白教育学部校庭内遺跡・長野県平出遺跡(～昭28)調査
- 昭和26(1951)年 神奈川県根岸古墳群・東京都江古田遺跡(鷲宮高校歴史部と共催)・亀塚古墳(～昭28)・



鳥居龍蔵と樋口清之ら

- 昭和7(1932)年 樋口清之助手着任(昭20教授・昭54名誉教授)
- 昭和8(1933)年 『考古資料集』第1輯を上代文化研究会が発行
- 昭和9(1934)年 東京都下沼部貝塚調査(大山史前学研究所と共同)
- 昭和10(1935)年 神奈川県下末吉貝塚・千葉県曾谷貝塚調査

コラム① 『上代文化』と『若木考古』

國學院では古くから講義があったとはいえ、長らく「考古学」と「人類学」程度の僅かな科目数のみであった。その欠を補い、実質的な研究・教育の中核を担ったのが考古学資料室を拠点とした上代文化研究会(戦後は考古学会と改称)である。『上代文化』はその機関誌として昭和3年に創刊された。同会の性格もあって、戦前は考古学のほか、歴史学・民俗学・人類学の論考も掲載されている。國學院出身者のほか、柳田国男や森本六爾、山内清男などの寄稿もあって現在でもしばしば引用される重要な学術雑誌であるが、その編集は学生が担っていた。一方、『若木考古』は昭和25年に会報として創刊され、論説や回顧文、調査概要や論考などの短報が掲載された。両者を紐解くと、戦前・戦後の本学の教員・学生の動向を詳しく知ることができる。

学生運動の最中、昭和44年に『上代文化』が38輯で、翌年には『若木考古』が95号で休刊した。考古学専攻が設置され、カリキュラムも少しずつ充実し始めるとともに、『考古学資料館紀要』の創刊などもあって考古学会の役割も変化していったが、その後も『ゆにっと』・『原始公論』・『考古学会誌』など考古学会の会誌復刊は何度となく企てられ、また第Ⅱ部考古学研究会の『うつつわ』、中国考古学会の『巫州学誌』、古墳時代研究会の『古墳文化』などの学生を主体とした雑誌は刊行され続けた。『上代文化』も近年、考古学研究室の協力のもと復刊を果している。



千葉県市川第三中学校校庭遺跡調査

昭和27(1952)年 日本考古学協会第9回総会開催、考古学資料室が博物館相当施設に認定、埼玉県真福寺貝塚・新潟県千種遺跡調査

昭和28(1953)年 山梨県大生古墳群(～昭29)・茨城県マゴマイ塚古墳第3次・東京都西ヶ原貝塚・千葉県宮根遺跡調査



西ヶ原貝塚

昭和29(1954)年 山梨県花鳥山遺跡(～昭30)・千葉県岩井貝塚調査

昭和30(1955)年 日本文化研究所設置(以下、日文研) 神奈川県平沢同明遺跡・千葉県松戸河原塚遺跡調査

昭和31(1956)年 国学院大学考古学研究報告第1冊『常陸鏡塚』刊行

昭和33(1958)年 博物館学講座開講

昭和34(1959)年 神林淳雄著『土の文化』刊行

昭和35(1960)年 加藤有次学芸員着任(昭45助教・昭52教授・平15退職)

昭和36(1961)年 日本考古学協会第27回総会開催、秋田県大野遺跡・神奈川県三殿台遺跡調査

昭和37(1962)年 国学院大学考古学研究報告第2冊『武蔵伊興』刊行

昭和39(1964)年 杉山林継助手着任(～昭45・昭45日文研研究員・平3教授・平22名誉教授)、島根県忌部玉作遺跡・東京都中央道八王子地区関連遺跡(宇津木向原遺跡・栢原遺跡)・東京都鶴川遺跡群(～昭40)調査



宇津木向原遺跡

昭和40(1965)年 神奈川県東名高速関連遺跡(北高森古墳・三ノ宮下谷戸遺跡)・福井県王山長泉寺山古墳調査

昭和41(1966)年 佐野大和助教授着任(昭48教授・平4退職)、文学部史学科に考古学専攻設置、日本考古学協会第32回総会開催、中央道西調布・深大寺遺跡調査、国学院大学考古学研究報告第3冊『古代玉作の研究』刊行

昭和43(1968)年 国学院大学第Ⅱ部考古学研究会発足、長野県神坂峠調査

昭和44(1969)年 長野県入山峠調査

昭和45(1970)年 乙益重隆教授着任(平元退職)

昭和48(1973)年 青木豊学芸員着任(平14教授)

昭和49(1974)年 神奈川県勝坂遺跡調査

昭和50(1975)年 考古学資料室を「考古学資料館」と改称

昭和53(1978)年 小林達雄助教授着任(昭60教授・平20名誉教授)

昭和54(1979)年 新潟県壬遺跡調査(実習：～昭57・昭60・61)

昭和55(1980)年 吉田恵二講師着任(昭57助教授・平元教授)

昭和56(1981)年 東京都中郷遺跡調査(実習)

昭和57(1982)年 古墳時代研究会発足、考古学実習室完成、神奈川県あざみ野遺跡調査、東京都物見処遺跡調査(実習：～平11・20)

昭和58(1983)年 千葉県森山塚古墳調査(実習)

昭和59(1984)年 山形県北堂C遺跡・明神堂遺跡調査(実習：～昭60)

コラム② 神林淳雄(明治43年～昭和20年)

山形県生まれ。樋口清之らとともに鳥居龍藏から指導を受け、昭和9年に本学史学科を卒業。東京帝室博物館監査官補として関東大震災後の復興に携わり、古墳時代の刀剣類に関する優れた論考を残した。沖縄本島にて戦死したとされている。応召の前日まで手を入れていた『土の文化』は、昭和34年に本学考古学資料室から刊行された。



昭和60(1985)年 岩手県小田遺跡調査(大学院)・『國學院大學考古学資料館紀要』創刊
 昭和61(1986)年 石川県白山山頂遺跡調査(資料館：～昭62)、第Ⅱ部考古学研究会『うつわ』創刊
 昭和62(1987)年 谷口康浩助手着任(～平4・平19准教授・平23教授)、内川隆志学芸員着任(平19准教授)、長野県小馬背遺跡調査(実習：～昭63)
 昭和63(1988)年 東京都御所穴洞窟遺跡・帆縫原遺跡調査(資料館)
 平成元(1989)年 永峯光一教授着任(平9退職)、山形県河井山遺跡群調査(資料館：～平4)・長野県柳又遺跡A地点調査(実習：～平7)



柳又遺跡

平成5(1993)年 加藤晋平教授着任(平14退職)、山形県壇場遺跡調査(資料館)
 平成6(1994)年 祭祀考古学会が本学に事務局を置き発足、北海道弁天島遺跡調査(資料館)
 平成7(1995)年 東京都和泉浜C遺跡調査(資料館)
 平成8(1996)年 富山県尖山祭祀遺跡調査(資料館：～平9)、北海道美利河遺跡群調査(実習：～平18)
 平成9(1997)年 國學院大學中国考古学会発足、東京都八幡神社境内祭祀遺跡
 平成10(1998)年 福井県雄島祭祀遺跡(資料館：～平11)、茨城県石岡市遺跡分布調査(古墳時代研究会)
 平成11(1999)年 文部省学術フロンティア推進拠点「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」採択(日文研：～平17)。
 平成12(2000)年 広島県吉備津神社境内地(輪蔵)遺跡調査(資料館：～平14)、三宅島噴火のために物見処遺跡発掘調査中止(実習)

平成13(2001)年 120周年記念事業の一環として、英国ケンブリッジのフィッツウィリアム博物館にて「縄文の造型と心象風景」展・東京にて「日本のこころとかたち」展・「チンギス・ハン宮殿址の考古学的調査」(～平16)、物見処関連資料調査(実習：～平18)
 平成14(2002)年 藤本強教授着任(平19退職)、先史考古学談話会発足、文科省21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」採択(以下、21COE)、國學院大學中国考古学会『亜州學誌』創刊
 平成15(2003)年 ロシア連邦沿海地方オシノフカ遺跡・ゴルバトカ3遺跡調査(21COE)、静岡県伊豆山経塚遺跡調査(資料館：～平16)
 平成16(2004)年 ロシア連邦沿海地方ウスチノフカ8遺跡(21COE)、國學院大學古墳時代研究会『古墳文化』創刊



ウスチノフカ8遺跡

平成18(2006)年 山形県須部野A遺跡調査(資料館：～平19)、新潟県本ノ木遺跡調査(科研費)
 平成19(2007)年 「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」が平成19年度文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業に選定(以下、ORC)、新潟県本ノ木遺跡・卯ノ木泥炭層遺跡調査(実習：～現在)
 平成20(2008)年 柳田康雄教授着任
 平成21(2009)年 笹生衛准教授着任(平22教授)、長野県穂高古墳群調査(実習：～現在)、島根県琴引山調査(資料館：～現在)、新潟県卯ノ木泥炭層遺跡調査(科研費：～現在)
 平成22(2010)年 秋田県石倉岱遺跡調査(ORC)

※ここでは、本学関係者が調査に参画した主な遺跡名を列記したが、昭和50年以降は、本学が主体的に実施した調査に留めた。

コラム③ 江藤千万樹(大正6年～昭和20年)

静岡県生まれ。昭和10年に入学し、早速『上代文化』に論文を投稿。在学中に駿豆地方を中心とした縄文・弥生時代関係の労作を多数発表した。昭和13年には、酒詰仲男を中心とした貝塚研究会の創設に加わっている。大場磐雄のもと、洗田遺跡や菅生遺跡の調査でも中心的役割を果たした。沖縄本島にて戦死。





國大資料室音頭

- 一、みんな知ってるかい 高天原というところ
若木ヶ丘の ヤレ資料室 ヨイヨイヨイ
- 二、カント デカルト読んでみたが ヨイヨイヨイ
恋という字は ヤレ解りやせぬ ヨイヨイヨイ
- 三、考古学者に娘はやれぬ ヨイヨイヨイ
やれぬ娘が ヤレ行きたがる ヨイヨイヨイ
- 四、お前百まで わしゃ九十九まで ヨイヨイヨイ
共に 日本を ヤレ掘り尽くせ ヨイヨイヨイ

國學院大學伝統文化リサーチセンター資料館

「若木ヶ丘の歩けオロチー -フィールドワークの足跡を辿って-」

平成23(2011)年4月23日

編集・発行 國學院大學研究開発推進機構 伝統文化リサーチセンター
〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28
電話 03-5466-0401 FAX 03-5466-9237
URL <http://www.kokugakuin.ac.jp/oard/>

印刷・デザイン 株式会社 秀飯舎

